

## はじめに

乳牛が乳を搾れるようになるまでには、約2年もの歳月がかかります。ミルクを飲んでいた小さな子牛が、悠々と草を食むたくましい乳牛になるには、越えなければならないハードルが数多くあります。

たとえば、生まれたての子牛はあまりに小さく、身を守るすべを持たない生き物です。さらに、子牛が置かれる環境は満足行くものばかりとは限りません。

時間に追われた無理な介助。足りない初乳。そして成牛舎と比べ、夏は暑く冬は寒い古い施設。このような中では、子牛の事故が想像以上に多いのも無理のないことなのかもしれません。事実、NOSAIのデータによると出生子牛の死廃頭数は成牛のそれを上回ります。



しかし、子牛たちは2年後の農場を支える期待の星です。今は「稼がない牛」に見えても、農場内で最も大切に飼われるべき牛たちです。小さな子牛が立派な乳牛になるために必要なことは、「丈夫に生まれ」、「病気にならず」健やかに育つことです。

そこで、今年の改善資料では、この子牛（ほ育牛）にスポットを当て、「子牛の事故・病気」を防ぐ手法についてまとめてみました。

「子牛を丈夫に生ませるために必要なこと」。「子牛を病気にしないためにやらねばならないこと」。これらを中心に母牛の乾乳期管理からほ育牛の施設まで、具体的な事例を紹介したいと思います。

この冊子が皆さんの子牛の飼養管理に少しでもお役に立てれば幸いです。



育成牛は、現在搾乳している乳牛よりも遺伝的に優れている“将来の搾乳牛群”である。  
すべての酪農場で、育成牛は最高の管理を受ける価値がある。

Dr.Andrew.Johnson